

ビバハウス便り NO.61 第4回社会的ひきこもり支援者全国実践交流会

ビバハウス運営委員長 安達俊子

今年は雪が少なく、暖かい冬で終わるのかと思ったら、やっぱりそうはならなかった。2月に入ってからの雪の多いこと！寒いこと！実は、私は1年中で2月が一番嫌いだ。冷え性の私には冬の寒さが一番身にこたえる月だ。何枚重ね着してもだめだ。

足の先から冷え始め、そのうち足全体の感覚がなくなり、立っていられなくなる。北星余市高校在職中には、授業中14～15cmあるかないかの教壇から転がり落ちて、生徒たちが、“先生、なにやってんの”といいながら、助け起こしてくれたこともあった。今も2月になるとあの時の光景を思い出して、優しかった私の大切な生徒たち一人ひとりの顔が浮かび、思わず涙がこぼれ出る。

こんな寒風吹きすさぶ2月に、4年前から毎年重要な会合がある。「社会的ひきこもり支援者全国実践交流会」だ。今年は、札幌の北海道大学を会場に、2月21日、22日の2日間で開かれた。よりによって、20日の夜から日本全国の上空を寒冷前線が覆い、全道的に猛吹雪となった。

この吹雪を衝いて、ビバハウスからは、留守部隊の私ともう1名のスタッフを除き、夫と、3名のスタッフ、ボランティアのE君、北星学園大学文学部に在学中のボランティアY君、1年間の札幌での福祉専門学校の勉強をこの3月で終えて、4月1日から再度ビバの主任指導員として就任予定の森康彦さんの総勢7名の大部隊で参加した。

なぜこの大会が私たちにとって特別に大切かは、以前にも少し触れたが、ビバハウス誕生後数年して、和歌山から視察に見えた、金城先生や、山本教授（現立命館大学）などの皆さんが立ち上げてくださった会だからだ。和歌山の皆さんは、ビバハウスが全く緊急にひとりの北星余市高校の卒業生を救う為に作られた施設であるとの説明を受け、先生方が悩んでいた、「設立趣意書」も「募金計画書」もないままに、私の退職金全額を使って、中古のプレハブで建てたとの説明を聞いて、「それならば、私たちにも出来る！」と和歌山での施設建設に踏み切られる決断を下されたのだ。

視察後1年も経つか経たない内に、全国初の社会的ひきこもりの青年のための通所共同作業所「エルシテオ」の発足の報告を受けた。言葉を発する人は多いが、実行する人はほとんどいないとの思いを日ごろ持たされてきた私たちは、先生方の実行力に驚嘆した。その後NPOの認証にあわせた、「ひきこもり～助走から～」の出版記念会の記念講演を依頼された。夫とスタッフの森さんと3人で会に出席させていただいた。

こうした経過を経て、「社会的ひきこもり支援者全国実践交流集会」（第1回和歌山、第2回東京、第3回京都・立命館）が開かれるようになった。今回私たちが特にこの会で学びたかったのは、このところ大幅に人事の交代があり、大半は新しいスタッフに対して、最近メンバーの多数から寄せられた、「スタッフは私たちと同じ場にいつもいてほしい。そして同じ空気を吸ってほしい。」との要望に、正しく応えられる指導者にどうしたら成れるのかということだ。